

「自民か民主」でよいのか

門奈 丈石 (平野区)



昨年、秋には行われると期待された衆議院の解散は「3分の2」を超え、議席に未練があるのか、延ばしに延ばしてきただものの、厳しさを増す

民意に加え、自民党内のゴタゴタで、これ以上の維持は困難になり、やっと7月21日実施を決めた。

思えば「改革」の名の下に国民サービスの切り捨てや弱肉強食の市場原理に、軍事大国化と戦争のできる国への体制づくりなど、憲法無視の暴走が目立つ10年だったが、それを許したのは「劇場演出型政治の小泉マジック」に目を奪われ、この流れに拍手を送った有権者が少なくなかったからで、それにはメディアの責任も大きかったと思

う。

最近、メディアは二大政党による政権交代が民主政治の実践であるかのように描くし立て、その実現には小選挙区制が優れていると強引に小選挙区による総選挙を導入して15年、まさに二大政党による選挙戦らしくなってきた。しかし、「二大政党の激突選挙」とは何だ」と問いかけずにはいられない。

二大政党激突選挙は、政策の異なる二大政党が政策を通して選挙の提供し、選挙の洗礼を受けるのである。しかし、民主党は自衛隊の海外派遣をはじめ憲法問題でブレが目立ち、また「政治と金」の腐れ縁は同罪で、そのうえ大連立を図るなど、自民と民主の差はカレライスとライスカレ

ーの違いにすぎず、政治理念の隔たりは無いに等しい。

基本的政策に大差の無い二大政党システムに何の意味があるのか。それは保守党間で政権の「たらいまわし」を行い、保守政権の継続維持を図るものではないかと危惧せずにはいられない。戦前、イデオロギー的にさほど変わらぬ政友会と民政党が、政権交代を繰り返しながら右傾化していったではないか。

総選挙では、自民か民主のどちらかを選ばねばならぬように世論を誘導するメディアに騙されてはならない。投票日は8月末と暑い最中の長期戦である。夏バテ選挙にせず、未来志向のほすかしくない選挙にしたいものである。

会 員 投 稿



この夏の初め、非常に残念なことがあった。私の実家にある2本のビワの木が突然枯れてしまったのだ。

冬には白い花をつけ春先まではまだ青い葉を繁らせていたのだが、春の中ごろから急に葉が枯れはじめ、本来ならば実が色づき始める5月はじめ頃にはほとんど葉も落ち、わずかに芽生えていた若芽も妙に白っぽく弱々しげになり、何とか再生してくれないかという期待とは裏腹について夏前には全部が枯れてしま

った。

この2本の木は実家の裏庭に今から50年ほど前、私が小学3年生のときに種をまいて何本か芽が出てきたうちの2本でいつの間にか幹の直径20センチまで育ち、長年、初夏の頃には小粒で種は多いが結構甘い実をたわわ

9年でなりかねるといわれるほど、実がつくまで年数もかかり、病虫害にも強く寿命の長い木と聞いている。

最初、誰かが変な薬をまいたのかとも考えたが、この2本の木の周囲に生えているナンテン等のほかの植物は元気だった。

に成長してきた木だけに、もっと大事にしてやれなかったのかと心が痛む。植物は黙っているだけに、我われが知らぬ間にSOSを発しているのを見逃してはならない。

ところで、大阪府は今、御堂筋のイチヨウのイルミネーション化の寄付を募っている。冬の葉の落ちる間に、淀屋橋から本町までの実施を目指し、そのチラシには、イチヨウにやさしい装飾、省エネ1日1万円だから大丈夫とかかれている。クリスマスシーズンには何年か前から淀屋橋周辺

で実施されており、確かに華やかではある。しかし、夜、例え冬場であっても木に電飾をつけると根元の土の中の生態系が変化を受けるといふようなことを聞いたことがある。近くのホテルの周りの植え込みの木は年中電飾をつけられているがコードが重いのだろうが、近くでよく見ると他の木に比べて少し弱々しげである。人間が自分たちの楽しみのために植物に与える影響についてもっと考えねばと思う昨今である。

大阪に活気が戻るために色々なことをするのは良いことだと思う。これからも、御堂筋のイチヨウがいっまでも元気であることを祈って見守っていきたい。

ビワとイチヨウ

林 俊宏 (中央区)

につけて楽しませてくれたものだ。その木が理由も分からぬまま、突然枯れてしまった。何年か前からだんだん元気がなくなってきたというのなら、やはり寿命なのかしらとまだあきらめもつづ

た。害虫かウィルスの手合いかとも思ったが、枯れた枝を切り落として切り口を見ても侵されたような所見はない。今まで余り感じなかったが、実家に行く度にすでに切り株になってしまったビワを見るにつけ、私と一緒に

付を募っている。冬の葉の落ちる間に、淀屋橋から本町までの実施を目指し、そのチラシには、イチヨウにやさしい装飾、省エネ1日1万円だから大丈夫とかかれている。クリスマスシーズンには何年か前から淀屋橋周辺

で実施されており、確かに華やかではある。しかし、夜、例え冬場であっても木に電飾をつけると根元の土の中の生態系が変化を受けるといふようなことを聞いたことがある。近くのホテルの周りの植え込みの木は年中電飾をつけられているがコードが重いのだろうが、近くでよく見ると他の木に比べて少し弱々しげである。人間が自分たちの楽しみのために植物に与える影響についてもっと考えねばと思う昨今である。

大阪に活気が戻るために色々なことをするのは良いことだと思う。これからも、御堂筋のイチヨウがいっまでも元気であることを祈って見守っていきたい。

「夏の思い出」というキーワードで呼び覚まされる記憶は、なぜかすべて5・6歳の頃の記憶ばかりである。今から45年ほど前の事だ。

『蚊帳』

夏の夜は蚊帳を吊って寝るのが常だった。寝る前に渦巻状の蚊取り線香に火をつけて、蚊が死んだ頃を見計らって、蚊帳の裾を少しだけ挙げてすばやく中に潜り込むのだが、なぜかその行為が嬉しくて、きゅんきゅんと嬌声を挙げながら、何度も出たり入ったりしては、しまいに母に叱られ、最後はしょぼんとして布団

に入って寝ていた事を思い出す。あの頃の夏はそれなりに暑かったけれど、暑くて眠れないという事はなかった。今ではクーラーがないと絶対に眠れない。地球の温暖化は確実に進んでいることを実感する。

『夕立の思い出』

真っ青な空に広がる大きな入道雲、照りつける太陽の下で、まるで疲れた場を走り回っていたかのよう



ごと注射器を携えて、毎日、昆虫を捕まえるに出かけていた。捕まえる昆虫は、主にチョウ、トンボ、セミだった。クワガタやカナブンは何となく

夏の思い出

大山 秀作 (三島郡)

れて持ち帰った。家に帰ってから、羽を広げて、虫ビンで標本箱に固定した。それが昆虫採集の正しいやり方だとは思っていなかったが、特に気にする事もなかった。

タコ糸が6本の足に絡まり、超絶技巧亀甲縛り状態になって飛べなくなる

今まで捕まえた事のあるトンボは最大のもので、ギンヤンマで体長せいぜい10センチ。かたや、30センチあるというオニヤンマ、あまりの大きさに完全

る事など頭に浮かばず、向かってくるオニヤンマから、ひたすら逃げまわった。怖かった。

2度目は虫かごの中にに入れていたクマゼミである。その日はクマゼミの大漁日で注射液が足りず、生きたまま虫かごの中にに入れて持ち帰った奴が何匹もいて、家で標本にしようと思を覗いてみると、一つだけ2匹で1匹になっているクマゼミ

が、外れず、超気色悪くて、そのまま庭にポイした。この時点ではまだ交尾という子孫繁栄の愛の営みの事は知らず、怖かった。

3度目はアゲハチョウである。普通チョウは止まっているときは羽を閉じているものなのだが、そのアゲハは蛾のように羽を広げて葉っぱの上に止まっていた。弱っているようだった。簡単に手で捕まえられるので、例のごとく注射をしようとした。腹の部分を上に向けて驚いた。やたら大きな腹は縦にパッキリと裂けていたのである。一瞬総毛立

「夏の思い出」というキーワードで呼び覚まされた記憶は、すべて5・6歳の頃の記憶ばかりであった。今年は記憶に残る「52歳の夏の思い出」を作ろうと思う。わっ!! 気色わる!! 怖わ!!!